
好きの形

良泉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

好きの形

【Nコード】

N3530D

【作者名】

良泉

【あらすじ】

派遣先で出会った妻子ある彼との恋。こんなに好きになった人は結婚して…。こんなに好きな人と出会ったのに、自分は結婚している…。心から人を好きになれたのに、好きって言えない苦しさ…。数々の修羅場…。から、今も続く二人の関係。結末はどうなるのか、今の私にはわかりません…。誰にも話せない二人の好きの形の話です。不倫の恋に悩んでいる方へ…

ブローグ

『好き』の形にはいろんな形がある。好きって気持ちは、何も変わらないのに…

私と彼が出会ったのは2年前の秋。

私は、今まで勤めていた会社を辞め、次の仕事を探す為に就職活動の毎日を送っていました。できれば正社員で…と、仕事を探していましたが、27歳の私には、なかなか希望の仕事がなく、保険のつもりで登録していた派遣の仕事をしようか迷っていました。

「ご紹介したい仕事があるのですが…」

「…うん。」

「今、面接受けている会社があるので、そこがダメだったら、また紹介して下さい…」

派遣会社からの初めての電話でしたが、私は嘘を言って断りました。

今まで派遣の仕事をしなかったのがなかったので、派遣社員という働き方に、ちょっとだけ抵抗があったんだと思います。

結局、仕事が見つからないまま1ヶ月が過ぎた頃、派遣会社から連絡がありました。

「仕事は見つかりそうですか？」 「…。こんなに厳しいと思いませんでした…」

「1件ご紹介したい仕事があるのですが、話だけでも聞きに来ませんか？」

詳細はわかりませんでしたでしたが、直感で今回紹介される会社で働いて見よう！そう思いながら、次の日派遣会社へ行き2週間後からの勤務スタートが決まりました。

1 理想の形

久しぶりの仕事への緊張と、職場はどんな雰囲気なんだろう？と少しドキドキしながらの初出社。

「今日からお世話になります。西浦美穂です。一生懸命頑張ります！ご迷惑お掛けしますが宜しくお願いします」

私が派遣された会社は、某大手企業の営業事務の仕事。事務所に50名程のエンジニアと営業マン。女性は、私を入れて3名の事務所です。

男性の社員は10代後半から20代前半が5〜6人。大半が30代という、活気のある職場の雰囲気はとにかく文句無しの会社でした。

（覚える事は沢山あるけど、ここでずっと仕事したいな〜）
初日から仕事は沢山あって、覚える事も半端じゃない…。

しかし私は、仕事に対しての姿勢は、かなり男らしいというか…普段の性格も少々男っぽいのですが、忙しい！大変な！等と聞くととにかく燃えてくるので、そんな私にはぴったりの職場でした。

彼を初めて見たのは、入社2日目。

私は営業1係。彼は営業2係。席も離れていて横顔がチラッと見えるぐらいの距離でしたが、朝のラジオ体操の時に彼の顔を初めて見ました。

（やばい…あの人がっこいい…）

顔だけでは、絶対に好きになったりしないけど『顔』は私の理想でした。

（名前はなんて言うのかな…？う…んと、安田祐介さんか…20歳ぐらいかな？かなり若そうだな〜でも年下はちょっとな…）

顔、理想

でも年下はちょっとな…　これが初めて見た彼の印象でした。

係が違う私達は、ほとんど話しをする機会も無く、挨拶程度の会話をするだけの毎日を過ごしていました。

2ヶ月が過ぎた頃には職場の雰囲気にも慣れてきて、週末は同じ係の人達と飲みに行く事が多くなりました。その中でも年齢の近い笹木さんと仲良くなり、会社の事を色々教えてもらいました。

「ねーねー！会社で誰かタイプの人とか居た？西浦さんはどんな人が好きなの？まだわかんないか？顔だけなら誰かつこいと思う？」

「顔はねー安田さんかな…かなり好きな顔で、初めて見た時やばいつて思ったもん。まだ話した事ないけどねー」「やつぱり！俺嬉しい！安田さんかつこいよねー俺も男だけかつこいと思うもん。顔もだけど、性格も最高だよ！みんなに優しいし男が惚れる人だよ」

自分が褒められたように安田さんの事を話す笹木さんを見て、私も少し嬉しい気持ちになりました。

しかも、年下と思っていた彼は、私より4歳年上。この日から私は安田さんの事が気になりました。この時は、まだ彼が結婚している事、そしてこの彼をこんなに好きになるなんてまだ知りませんでした。

2 恋の始まり

相変わらず安田さんとは、挨拶程度の簡単な会話だけの毎日。
まだこの時は、意識してるのは私だけでした…

飲み会の席で、私のタイプが安田さんと知った笹木さんは、彼のいろんな話をしてくれるようになりました。20代の時のコンパの話し、デパートの化粧品売り場の娘にヒトメボレした時の話し、好きになると安田さんってこんな事してたんだよ…とか

私の印象とは違って、若い時の彼は、好きになれば電話番号渡したり…積極的な人でした。

（安田さん、あんまり私に話しかけないし、私はタイプじゃないんだな…きつと…）

相変わらず私達は挨拶だけで、特に会話する事もない毎日でした。

12月28日。

今日は仕事納め。午前中は仕事をして、午後からみんなで事務所の大掃除！

夕方5時から、事務所で仕事納めの納会がありました。

私は、あんまり目立たない端っこの席で、お酒を飲めない10代のコと一緒に、ジュースを飲みながら話をしていました。

「西浦さ〜ん！ちよつとこっちおいで〜」

少し酔っ払った声で私を呼んだのは笹木さんでした。笹木さんの方を見ると、隣には安田さんが座っている…

ちよつと緊張しながら私は、二人の間に座りました。「安田さん！西浦さんとあんまり喋った事ないですよね？」

「う〜ん。挨拶ぐらいしかないかもね〜本当は話しかけたいけど、

嫌がられたらショックだしさ」

安田さんは、冗談を言いながら、すごくかわいい笑顔を私に向けました。

「そうそう西浦さんね、安田さんの事、一番かつこいいって思ってるんだよ！タイプなんだって！こないだ聞いちゃったんですよ」

笹木さんからの、思わぬ一言でした。

「ちよつと！何本人に言ってるの！恥ずかしいでしょ」

「別にいいじゃん！かつこいいって言われたら安田さんも嬉しいよ」

私は恥ずかしくて、顔を真っ赤にして、照れ隠しに笹木さんを叩いて笑っていました。彼を見ると、彼も顔を真っ赤にして笑っていました。後で彼から聞いたら、この日から彼の中でも私を意識するようになったようです

またいつもの毎日が始まりました。相変わらず私達は挨拶程度の会話だけでした：

「西浦さん、今日係の飲み会するんだけど来ない？」

久々の飲み会に参加した私は、これまた久々のお酒に楽しくなっていました。「2次会、いつもの店行こうか！なんか今日は2係も飲み会らしいから後で合流するからね」

（な～に！2係？安田さんも居るかな～）

ドキドキしながら、みんなでいつもの店に行きました。

（あっ！安田さんいた！） 店に入ると、安田さんが歌っていました。

（ちよつとお酒も呑んでるし、頑張つて話しかけてみようかな～）
なんて事を考えている時、隣に座ってた笹木さんが席を立ち、空いた席に安田さんが座りました。

「どうも。西浦さんは何飲んでるの？」

ほっぺたを赤くした安田さんが話しかけてきました 「カシスオ

レンジですよ。安田さん歌上手ですね！初めて聞きました」

いろんな話をしました。休みは何してるの？車は何乗ってるの？学生の話や、好きなものの話…

周りがうるさかったので気がつく、二人の顔が近づいていました。

「こんなに話したの初めてだね？俺さ、ずっと西浦さんと話してみたかったんだ。会社での西浦さんしか知らないけどさ、西浦さんってかっこいい人だなって思ってたんだよね。」

「私も話してみたいと思ってましたよ。もうばれちゃってるけど、かっこいいなって最初は思ってた、仕事してるとこしか見てないけど、仕事も出来て周りからの信頼もあって、男の人の前に人として尊敬してました…」

お酒が入ってることもあって、彼と沢山話をしました。

少しして私はお手洗いへ行きました。この店のトイレは男女共同なんです、私が手を洗っていると、安田さんがトイレに入ってきました。

「あつ！美穂ちゃんだ」「大丈夫ですか？」

「そんなに酔ってないから大丈夫だよ」

「あんまり飲みすぎないで下さいね。じゃあ私、先に戻ってますね」

「ダメ！ここに居て一緒に戻ろう」

あんなかわいい笑顔で言われてしまい…私はトイレの鏡で髪を直しながら、彼が出てくるのを待っていました。

ガチャ…

「痛い痛い痛い！」

ドアが開いた瞬間、何か企んだ顔と彼の手が現れ、私は彼に引張られトイレの中に入ってしまった（どうしよう。安田さん酔ってるよね。どうしよう…）

嬉しいような、怖いような…何かされるのかドキドキしてしまし

た。

酔っ払った彼は私の肩に手を置いて、下を向いてる私の顔を覗き込みました。「俺酔ってるかな…なんかすぐドキドキしてるわ。俺さ西浦さんと本当に話したかったから、話せて嬉しいよ。こんなトイレで話す事じゃないか？酔ってるのかな？美穂ちゃんに酔ってるのか？俺くさいかな？ん？トイレだからか？」

「アハハ！何言ってるんですか！なんか恥ずかしくなってきた！戻りましょうか」

ガチャ…

戻ろうとした時、トイレに誰か入って来ました。彼は私を見ながら、声は出さずに

（この人が出たら戻ろうか）

そう口を動かし、そっと私を抱きしめました。そして、私の顔に彼が近づいてきました。

「酔ってますよ…こんなところで恥ずかし…」

彼に囁きかけましたが、途中で彼とキスをしました。あつという間でしたが、長い時間キスをしていたような…嬉しい気持ちと、お酒を飲んでした事で少し複雑な気持ちになりました。

この日から何か変わるかな…と思ってましたが、今までと何も変わる事なく、安田さんもこないだの事なんて忘れているようないつもの毎日でした。特に電話番号も聞かれる事もなかったし…

（やっぱり、こないだはお酒飲んでたし…キスしたのも覚えてないんだなきつと）

数日後、笹木さん達とカラオケに行く事になりました。私は途中から参加しました。部屋のドアを開けると、先に来てたみんなは酔っ払って出来上がってる感じでした。

何曲か歌ってから、私は酔っ払いの相手と部屋の暑さに耐えられず、外の階段で涼んでいました。

外で携帯をいじっていると…

「お疲れさん！何してるのこんな所で」
そう言っ　て私の頭をポンポンと叩いて隣に座りました。
安田さんでした。

3 好きだけど…（前書き）

派遣先で出会った妻子ある彼との恋。こんなに好きになった人は結婚して…。こんなに好きな人と出会ったのに、自分は結婚している…。心から人を好きになれたのに、好きって言えない苦しさ…。数々の修羅場…。から、今も続く二人の関係。結末はどうなるのか、今の私にはわかりません…。誰にも話せない二人の好きの形の話です。不倫の恋に悩んでいる方へ…

3 好きだけど…

「あつ…安田さん…お疲れさまです。」

「お疲れさま…こんな所でどうしたの？」

「途中から来たから、みんな酔っ払いになってるし、ノリについてくの疲れたから休憩してたんです。安田さんは？今まで仕事してたんですか？」

「働いてたよ…疲れた…帰ろうかと思ったら笹木から電話来たからさ！でも来て良かったよ！…あのさ…西浦さん…こないだごめん…」

少し笑って、うつ向いたまま私に言いました。

「…こないだの事覚えてるんですか？」

「うん。俺嫌われちゃったかなと思ってさ…覚えてないって言いたいけど…もちろんハッキリ覚えてるよ。なんかチューしたくて、オレちょっと酔ったふりしてたかも…大丈夫？嫌われたかな…」

「嫌ってませんよ…びっくりしたけど…恥ずかしいような、でもちょっと嬉しかったし…」

「本当に？良かった…ずっと気になってたんだ…」そう言って彼は笑顔で私の顔を見た瞬間、ほっぺたにキスをしてお店に入って行きました。

「よゝし！みんな2次会行くよゝ」

（係長…私、今日はここで帰りますね…）

いつもは、3次会4次会…と最後まで残る私ですが、今日は眠くなっていたので、係長の畑山さんに伝え、帰りました。

10分後…

「もしもゝし！美穂ちゃゝん！何帰ってるの！戻っておいでゝみんな待ってるよ！今ね…」

笹木さんからの電話でしたが、途中で電話が切れてしまいました。

「ん？誰だろ…もしもし…」

また携帯が鳴りました。登録してない番号でしたが、声は笹木さんでした。

「ごめんねゝ電池なくなつて電話切れちゃった。美穂ちゃん、まだ電車乗ってないんでしょ？もう1軒だけ付き合つてよ！迎えに行くからさゝ」

「…わかりましたよ！次で今日は本当に帰りますよ！最近ちよつと金欠だし…」

「了解！オレ迎え行くからさ！これ安田さんの携帯なんだけど近く来たら電話してゝ」

「はいはいゝわかりましたよゝ」

また私は2次会の店に戻る事にしましたが、思わぬ形で安田さんの電話番号を知る事が出来ました。

（まあ、かける事は無いけど、一応登録しとこつとー！）

安田さんの携帯にも、私の番号が残っているハズなので、かけてきてくれる事を期待して彼の番号をメモリしました。

『682 安田さん（仕事）』

お互いの電話番号を知ったハズなのに…相変わらず何も変わらない

い私達…

私は、気付くといつも彼の事を考えていました。休みの日にも、ボーっとしながら気付いたら彼の事ばかり考えていました。会社で、他の女子社員と話してる姿を見ると嫉妬する自分がいました…彼を好きになっていました…

彼への気持ちに気付いてから少したった頃…安田さんと係長との会話に耳を疑いました。

「龍太は元気？今何歳だっけ？」

「あゝ4歳です」

「龍太ってさ、ホント祐介そっくりだね」

（えっ…えっ…？龍太って…4歳？えっ…安田さん子供いるの？）
シヨックでした…安田さんには、4歳の男の子と2歳の女の子がいました。

2人の子供の父親でした。結婚もしていました…。

たまたま今まで、彼が結婚してる事を耳にしなかったただけだったのか、私も結婚してるの？なんて聞いていませんでしたし…

彼は特に隠してたわけじゃなかったと思います。左手には指輪もありました。ずっとしてたのか、していなかったのか今まで気付きませんでした。

彼の事は大好きでした。でも不倫は…憧れの人ではあるけれど、諦めなきゃと思いました。

いつもの飲み会…私は安田さんへの気持ちはまだ好きのままでした。こんな事を言うはずだと思いますが、あの電話がなかったら…もしかしたら今頃私達は、また違った暮らしをしていたかもしれない…

プルルル…

着信を見ると、先に帰ったハズの安田さんからの電話でした。私は、あの時携帯に番号を登録したんだなと思われるのが恥ずかしくて、安田さんと判らないフリをして電話に出ました。

「はい…もしもし…」

「もしもし。こんばんわ！誰か判りますか？」

「え…誰でしょうか…？わかんないですけど…」

「どうも。安田です」

安田さんは、少し酔っ払っているようでした。電話で少し話しをして、もうちょっと飲みたいので良かったら一緒に飲みに行こうという事になりました。

近くに居たので、すぐに合流してカラオケに行く事にしました。

私が歌い終わると、彼は少し眠そうな顔をして、私の膝に頭を乗せて横になりました。

正直、私は心臓がドキドキしていて歌を歌ってる場合じゃありませんでしたが、冷静に冷静に…自分に言い聞かせて歌っていました。でもお酒を飲んで、2人きりでカラオケに居た私達は、何度も何度も抱きしめてキスをしました。駄目だとは判りますが、ギュツと抱きしめてもらいました。

カラオケを出たのは、朝の4時…彼の酔いはすっかり醒めていて、少し恥ずかしそうにしながら、手を繋いでタクシー乗り場へ行きましました。

「楽しかったね。じゃ、また月曜だね。ゆっくり寝てね」

「私も楽しかったです。じゃまた来週…おやすみなさい」

結婚していなければな…何度思ったでしょう。

大人になるほど、素敵だなと思う人は、既に誰かの者になっっている事が多く、人の者だから、手にはいらなから、奪いたいだけだ…散々悪く言われるけれど、不倫したくてしている人ってどれくらいいるんだろう。好きって言う思いは同じなのに…

結婚してなければ良かったのに…

4 二人の距離

さっきまで安田さんとずっと一緒だった私は、家に帰ってからもボーっとしたまま、気付けば彼の事ばかり考えていました。

やっぱり不倫はダメだ…もつと好きになってしまいう前に諦めなきや…今なら戻れるという思いと、好きな人と一緒にいれた嬉しさ…複雑な気持ちでした。

私は化粧もしたまま、いつの間にか眠っていました。目が覚めたのはお昼を過ぎた頃でした。

（あゝあ…眠い…）

眠い目を擦りながらも、少しだけ顔が笑っている私が鏡に映っていました。

（あゝあ…眠たいなあ…よしっ！ちよつと気分転換に買い物でも行くか）

このまま家にいるのももったいないし、今日はバーゲン初日という事もあったので、用意をして、化粧もしなおして買い物へ出掛けました。

4時間ほどプラプラ買い物をした私は、少し歩き疲れたので近くのスタバで休憩をしていました。コーヒーを飲みながら、携帯を見ようと手にとると

安田さんからのメールでした。

なんだろう…と冷静に装いながらも、周りの人に音が聞こえるんじゃないかというくらいドキドキしながらメールを見ました。

『お疲れさま！昨日はとても楽しかったです。もしかしたら寝てるかな？俺は書類を片付けに会社来てるよ…仕事だ…また今度はご飯でも食べに行きましょうね』 RE:

『お疲れさまです…仕事してるんですか？あんまり無理しないで下さいね！私も、昨日はとても楽しかったですよ ちなみに…私は今バーゲンに来てます…買い物してました』

『バーゲン！？いいのあったかな？俺も後から買い物行く予定でした！よし！仕事片付けよっと！』

RE：

『頑張つて下さーい！』

安田さんが買い物に行く頃に、もしかしたら連絡が来て会えるかもしれない…どこかでそんな期待をしていた私は、一通り買い物は終わっていました、またブラブラ時間を潰していました。

それから1時間経った時、メールが届きました。

『俺もバーゲンで買い物しました！5万使ってしまった！～疲れた～腹減った～』

RE：

『沢山買い物しましたね～私もまだ買い物中ですけどね！』

『まだ買い物してたの？どの辺？多分近くだよね？』

RE：

『パルコの近くですよ！安田さんは？』

安田さんからの電話でした。

「もしも～し。どーも安田です。今さ近くにいるから、この後予定なければ、なんか食べに行かないかい？俺腹減っちゃって～」

「いいですよ～私も沢山歩いたし、お腹空いたところです。何処に居ればいいですかね…あっ！」

信号待ちをしている人の中に、携帯で話しながら私に気付いた安田さんが、笑いながら手を振っているのが見えました。

「近くにいたんだね～すぐ会えて良かったよ～何食べたい？」

初めて、私服の安田さんを見ました。スーツや作業着姿もかっこいいのですが、私服はオシャレで更に若く見え、なん倍も素敵でした。二人でパスタを食べに行きました。

お互いホントのプライベートで会うのは初めてだった事もあり、二人ともいつもと違う雰囲気でした。

初めは、どこかぎこちない感じでしたが、だんだん会話も弾んでくると、お互いとまらなくなっていました。二人とも沢山笑いました。

「あの…お客様…申し訳ありませんが、当店閉店の時間になりますので…」

「あつ！すみません。すぐ出ますね！」

彼との時間は、本当に楽しい時間でした。好きなお笑いの話し。好きな食べ物の話し、好きな物、好きな服…どんな話しをしても、彼と私は『あゝわかる』『俺もそう』『考える事、思う事…彼とは本当に気があいました。』

不思議と、お互い言葉にしなくても何を思っているのかがわかりました。

ずっと昔から知っていたような、ずっとずっと一緒に居たような…一緒にいるとそう思える、そんな私たちでした。

この日から、私達は毎日メールや電話で連絡を取るようになりました。

最初は敬語で話していた私達も次第に、安田さんから祐介君。祐介…

西浦さんから美穂ちゃん、美穂…へ変わりました。パスタを食べに行った以来、二人では会ってませんでした。来週久しぶりにご飯を食べに行く約束をしました。

『もしもし〜終わったよ〜これから帰るよ〜寝てたでしょ？ごめんね』

『今日も遅かったね〜1時過ぎてるよ〜疲れたでしょ？お疲れさん〜』

『疲れた〜でも美穂と話すと元気になるんだ〜』

『そうなの？ありがと〜なんか…嬉しい』

『美穂。明日は、大丈夫そう？』

『うん。大丈夫だよ〜祐介は？仕事忙しいでしょ？』

『まあね…7時には帰りたいんだけど…頑張るわ〜仕事の様子連絡するからね。遅くなりそうなら、美穂も時間調整して仕事してて〜』

『明日楽しみだね！』

『また明日ね！遅くまでごめんね〜美穂と話すと気付いたら、いつも1時間は話してるよね…もっと話したいよ…明日楽しみにしてるね ゆっくり寝てね〜おやすみ』

久しぶりに二人で会える事になり、私は嬉しくてなかなか眠れませんでした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3530d/>

好きの形

2010年10月22日14時04分発行